

## シンポジウム「島根の学校図書館の明日を考える」要旨（抄）

### ○シンポジスト（敬称略）

社団法人全国学校図書館協議会	理事長	森田 盛行
八洲学園大学	教授	高鷲 忠美
川本町立川本中学校	校長	佐藤 文宣
松江市立宍道小学校	司書教諭	林 良子
松江市立揖屋小学校	学校司書	門脇久美子

### ○コーディネーター

島根県教育庁義務教育課長 矢野 英明



島根県では平成21年度から学校図書館活用教育を推し進めている。〈子ども読書活動推進事業〉と称したこの事業の展開をはじめて2年半が過ぎた。これまでにこの事業の成果も見え始めているが、同時に学校図書館活用教育の課題もみえてきている。

これまでの2年半を踏まえながら、島根の明日の学校図書館はどうあるべきか、そのために今後学校図書館の活用はどう取り

り組んでいくのかについて、5人のシンポジストと約2時間にわたって話を進めた。

### 学校図書館の役割

**矢野** まず、「学校図書館の役割」について考えていきたい。学校図書館の役割については、学校図書館法の中では「図書資料の収集，整理，保存とそれらを見学生徒及び教員の利用に供することで教育課程の展開に寄与する」こと、「見学生徒の健全な教養を育成する」とされているが。

**高鷲** 学校図書館法の文言を別の言葉に直すと、図書館の機能は「読書センター」と「学習・情報センター」ということになるが、学校図書館は、これまでどうしても読書センターに偏りがちであった。わたしは学校図書館を学校教育のインフラとしてとらえている。電気・ガス・



水道が生活のインフラであるように、学校の教育活動を支えるのが学校図書館であると思う。私に関わっている（山形県鶴岡市の）朝暘（ちょうよう）第一小学校では、教師は授業が命だから、授業に学校図書館が関わらなければダメだ、読書活動と学校図書館を活用して情報活用能力を育てるということを全ての子どもたちに保障するという取組をするようになってから、現在学校図書館の活用において日本のトップを走るような実績を上げている。

学校図書館は目的でなく、道具、手段だ。学校図書館を追究するときそれが目的化するとおかしくなる。学校図書館に学校司書がいて資料をそろえたり、改造をしたりして授業に使う。そしてそれを支える読書がある。そういう形にもっていきたい。



**佐藤** 学校教育には「〇〇教育」と言われるものがたくさんある。学校図書館活用教育もその一つという捉えをされることがあるが、そうではない。高鷲先生が言われたように学校図書館をインフラとしてとらえ、図書館を使ったらこんなにいい授業ができたとか、子どもたちが育ったとか、そういう手応えを先生達が味わう機会が多くなればと思う。

午前中の4人の子どもたちの発表を聴いて胸が熱くなった。「あなたにとって学校図書館はどんなものですか」というインタビューに答えていたが、その答こそが私たちの目指している図書館ではないかと思う。

人が入ることで図書館にぬくもりが生まれた。保健室登校という言葉があるが、今まで登校できなかった生徒が、学校図書館に登校するようになって、その後教室に戻れたという例もある。「いやしの場」であったり、「夢を語る場」であったりというもの、学校図書館の役割として大きいのではないかと思う。

**林** 学校図書館は子どもたちの学びやくらしを豊かにする場所であり、夢をかなえる世界に通じる場所だ。学校の中の外に開いた場所が学校図書館だと思う。授業で使う学びの場であると同時に、休憩時間に好きな本を選んだりできる自由な場所、そして個に応じた学びに応じられる可能性をもった場所でもある図書館。そういう役割を果たしていきたいと思う。

## 学校図書館活用教育

**矢野** 「学校図書館活用教育」というと「読書」という視点と、「学校図書館の図書資料を活用した授業」という視点があるが、ここでは後者の視点で考えたい。学校図書館活用教育をどのようにとらえればよいか。

**森田** 日本の図書館は、長く読書センターであった。しかし近年、学習センターとしての機能が強く求められている。

今まで日本の教育は、教科書を理解し、その理解の程度をテストで計るといった形で進んできた。しかし、そういう形では成り立って行かないということで、OECD等の結果も踏まえて文部行政が大きく舵を切った。習得型の学習も大事だが、それだけではなく、探究的な学習も大切だ、両者が大切だということになってきている。そういった学習を進めることを担保できる学校図書館であることが必要だ。

学校図書館活用教育についての多くの先生方のとらえ方は、学校図書館の必要性はわかる、しかし、ただでさえ忙しいのにさらに図書館を使えと言われてもできない、といったものだ。

例えば1単元10時間の学習があるとすれば、10時間の外で使うというのではなく、10時間の中に活用を入れるというとらえ方をしていけばどうか。また、学校図書館を1コマ50分間フルに使うというのではなく、10分間だけ使うという風に気楽にとらえることが大切ではないか。



**門脇** 学校図書館を活用した授業を始めていない頃、高学年で調べ学習をしたことがある。積み上げられたものがないので、「本を読む」というところすでに困難に突き当たる子どもたちもいた。また図書を使って調べて、どこに書いてあるかというところまでたどり着いても、大切なことを読み落とす子どももいた。結局中身の濃いものにはならず、まとめたものにも自信がもてないので、発表もうまく

いかないという悪循環になっていた。教員も、調べさせるのに時間はかかるし、評価しようとしても子どもたちの成果物は評価に値しないものであり、徒労感があった。子どもたちも「調べ学習」と聞くと「チョーやだ」という反応が返ってくる有様だった。

これではだめだということで、司書教諭が担任と一緒にあって、情報の取り出し方やテーマの設定の仕方といった情報活用のための学習を押しえていった。学校司書も、どんな資料を集めてくればいいのか、どんなことをつかませてあげればいいのかといったことを先生達と相談して授業の流れを作っていた。

今、学校図書館が自分の学びを育む場となったと思う。文字を読めるようになったばかりの1年生が図書館に来て「もっと勉強したい」と言ったことがあるが、図書館が自分一人で学ぶ意欲を引き出している。学校図書館は子どもの学ぶ意欲を引き出し生きる力に変えるところでもある。授業で学んだことを活かして調べたり、まとめた

り、発信しながら、「わかった」ことを「できる」力に変化させている。

### 学校図書館活用教育の成果と課題

**矢野** 平成21年度から取り組んでいる子ども読書活動推進事業は、その成果も見え始めているが、全県という単位で考えてみると課題も見えてきている。成果と課題についてどう考えるか。



**佐藤** 成果としては、まず図書館に人が入ることによって、ぬくもりのある使いやすい図書館になったことが挙げられる。子どもたちからも使いやすくなったと声があがっている。全教職員で取り組むというような意識に少しずつ変わってきている。

だが、「次にどのように活用していくのか」ということについては未だ十分ではなく、私自身の課題であり、島根県の課題であるかと思う。この一連の子ども読書活動推進事業は5年間で一つの区切りとなる。今、2年半ということなので残りの2年半で、ある程度の成果をまとめていくことになる。その際、この事業によって、子どもの姿がこう変わったということについて説明する必要があると思う。学校図書館の活用によって学力調査の結果があがったといった数値的なものも大事かもしれないが、教職員の感触や手応えのようなものを大切に、情緒的な面、感性の面、表現力の面など、子ども変化について伝えていくことが必要になってくるのではないかと思っている。

そのためにも、自分流でいいから図書館と関わってみたらということ職員に伝え、「図書館を使うとこんないいことがあるんだ」といった手応えが味わえる場をさらに創っていく必要であると思う。

公共図書館との連携、小中高の連携といった「連携」ということも大切にしたい。昨日の分科会で小中の教員がポプラディアの使い方や情報カードの書き方などを一緒に研修しているという例が紹介されていたが、こういった具体的な取組を一緒になって進めていくことが、今後島根県の図書館活用を進めて行く上で重要であると思う。



**門脇** 学校司書が全校に配置されたというのが一番大きな成果。何もなかったところが子どもたちが集まる場所になった。1校や2校でなく、県を通じて全県下に浸透していくというのが成果であると思う。揖屋小学校には専任の司書教諭がおり、きめ細かに生徒をみている。県の事業によって専任が可能になっているが、専任であるから多様な活動が取り入れられている。これがもう一つの成果。知事の一言で県が動き市町村が動き、学校において子どもたちの学びに生きていると思う。

これがもう一つの成果。知事の一言で県が動き市町村が動き、学校において子どもたちの学びに生きていると思う。

**林** 県の作ったDVDを職員研修としてみんなで見ている。共通理解をもってみんなで取り組むことで、情報担当の教員が情報カードを作り、書き方の指導は司書教諭が担当して授業を行うというような分担ができるようになった。学校図書館の管理職研修が行われるようになったが、管理職の理解があるかどうかで随分違う。校長先生が子どもたちの読書について全校集会で褒めてくださったり、学校だよりに取り上げてくださったりすることで、子どもたちにも教員にも励みや自信になっている。県の図書館担当者等研修が県内各地の市町村に影響をもたらしていることも大きな成果だ。司書教諭や担当者が連携して、授業につなげようという動きが出てきている。

読書が充実したから読書センターとしての役割は終わりではなく、これからも身近な大人が子どもと本を出会わせることを継続してやっていきたい。



**フロア** ここ3、4年の間に急激なスピード感をもって学校図書館が認知されるようになったと感じている。学校図書館が一般的な会話の中にも出てくるようになった。しかし、これはスタートしたところだと思っている。小中高と積み上げていくためには、それなりの年数をかけなければ実際の力にはならない、これからが実績と問われるときだ。継続して初めてものになるという気がしている。島根の誇りとして息の長いものに脈々と続いて欲しい。

**高鷲** 島根県の学校図書館は活発に動いていると感じる。しかし、司書教諭の時間をどう確保していくかは課題であろうと思う。司書教諭の時間軽減を実現していただければと思う。学校図書館を活用することでどんなに子どもが育つのかということ、教員が実感しないと使っていただけないと思う。それも課題。

**森田** 島根県では小学校教員の6割が学校図書館活用のイメージをつかんでいる。学習センターとして使うという認識が芽生え始めたところだ。学習モデルをこれから築いて行くところだと思う。理論ではなくて自分で使ってみることが大切なことではないかと思う。島根県でそういった事例をたくさん作ってもらえればありがたい。

今後目の前に迫ってきている電子書籍。ICTと学校図書館をどう折り合いをつけていくかも課題だ。

**矢野** 島根県の学校図書館の取組は、ようやく動き始めたところだ。しかし、この動きは市町村を巻き込んだ大きな波であり、点と点がつながりさらに面となって広がっている。これまでの成果を積み重ね、県内すべての学校で図書館活用教育を通して、子どもたちの目を輝かせたいと思う。